慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	橋本増吉博士略年譜
Sub Title	
Author	竹田, 龍兒(Takeda, Ryuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009 - 1957
Jtitle	史学 Vol.29, No.4 (1957. 3) ,p.107(471)- 110(474)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570300-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

橋本增吉博士略年譜

明治十三年（一八八〇年）六月十二日橋本元洋の長男として長崎縣諫早市に生る。家は代々諫早侯の侍講たり。父元洋に至り醫を以て業とす。

明治十七年（一八八四年、五歳）兩親と共に長崎市に移る。

明治十八年（一八八五年、六歳）十二月三十一日妹レイ生る。（戸籍面には十九年二月十九日出生とあるも實際は本日なり）

明治十九年（一八八六年、七歳）七月、諫早なる祖母の膝下に歸り幼稚園に入る。九月尋常小學校に入學。

明治二十一年（一八八八年、九歳）長崎に戻り、鶴鳴小學校に轉校。

明治二十三年（一八九〇年、十一歳）高等小學校に入學。

明治二十六年（一八九三年、十四歳）この年の初めに風邪を患ひやがて肋膜炎となり休學。

明治二十七年（一八九四年、十五歳）九月、縣立長崎中學校に入學。武部欽一、羽生隆、龍山義亮らの諸氏は當時の同級生なり。

明治三十二年（一八九九年、二十歳）七月、中學校卒業。この年呼吸器病を患ひ爾後二ケ年有余にわたり療養生活を送る。

明治三十五年（一九〇二年、二十三歳）正月上京。八月、第六高等學校に入學。同級生に勝正憲氏らあり。

明治三十八年（一九〇五年、二十六歳）九月、東京帝國大學文科大學支那史學科に入學。本郷森川町に下宿す。

明治三十九年（一九〇六年、二十七歳）羽田亨、原田淑人の諸氏と共に東京帝國大學文學部内に東洋史談話會を創立。

明治四十一年（一九〇八年、二十九歳）七月、東京帝國大學卒業。この年四月十日附にて東京高等女學校（校長棚橋絢子）の囑託教諭となり、歴史及び英語を擔當。

明治四十二年（一九〇九年、三十歳）一月、早稱田大學文學部講師となり東洋史を講ず。

明治四十三年（一九一〇年、三十一歳）三月、東京高等女學校を退職。九月、慶應義塾大學豫科教員となり地理（翌四十四年以後は地理及び歴史）を擔當、同時に普通部に於て歴史を講ず。

明治四十五年（一九一二年、三十三歳）慶應義塾大學史學科講師を兼任。

大正二年（一九一三年、三十四歳）六月、星野恆の二女清と結婚し、麻布天現寺橋附近に新居を構う。

大正三年（一九一四年、三十五歳）十月四日、長女美智子出生。

大正六年（一九一七年、三十八歳）普通部兼任を解かる。

大正八年（一九一九年、四十歳）夏、三田山岳會支那朝鮮滿洲方面旅行團第二隊に加はりて大陸各地を歴遊す。三田評論に連載

の「燕山楚水」と題する文章はその紀行文なり。當時學生たりし松本信廣氏、濱忠次郎氏等も行を共にす。十二月限りにて早稻田大學講師を辭任。

大正九年（一九二〇年、四十一歳）慶應義塾大學文學部教授となる。

大正十一年（一九二二年、四十三歳）下荻窪三十番地（現在の杉並區荻窪三丁目四十七番地）に轉居。

大正十二年（一九二三年、四十四歳）八月、田中萃一郎博士急逝せられ、九月以後代りて史學研究法及び東洋史演習を擔當。これより以後三田史學會及び「史學」のために大いに盡瘁せらる。

大正十五年（一九二六年、四十七歳）文學部史學科專任となり豫科兼務を解かる。なほ間崎万里氏海外留學のためその留守中西洋史をも擔當。

昭和三年（一九二八年、四十九歳）正月より二ケ月間文部省の對支文化事業の一として組織されたる支那視察團（團長鹽谷溫氏）に加はり渡支。三田評論所載の「鴻爪慢錄」はその折の旅行記なり。

昭和四年（一九二九年、五十歳）七月十四日母クン死去（七十一歳）

昭和五年（一九三〇年、五十一歳）六月、柴田常惠氏と始めて日吉臺の所謂矢上一本松古墳（第一號墳）の調査を行う。

昭和七年（一九三二年、五十三歳）五月、日吉臺第一號住居址を發掘。

昭和八年（一九三三年、五十四歳）三月、大亞細亞協會創立され、間もなくこれに入會し理事となる。

昭和十年（一九三五年、五十六歳）四月より翌年三月まで東京文理科大學講師を囑託。

昭和十二年（一九三七年、五十八歳）四月、東京帝國大學文學部教授會に論文「支那古代曆法史研究」を提出。

四月二十一日、父元洋死去（八十一歳）

昭和十三年（一九三八年、五十九歳）七月より約一ケ月半にわたり學生淺村一郎、川村善三郎の兩君及び犬塚久雄氏（氏は南京まで同行）と共に中支及び北支を視察し、途中殷墟に於て發掘調査を行ふ。三田評論所載「後岡の發掘に就いて」及び、大亞細亞主義所載の「大陸視察雜感」はこの第三次大陸旅行の記事なり。

昭和十四年（一九三九年、六十歳）四月、東洋大學講師囑託。

昭和十五年（一九四〇年、六十一歳）一月、東洋文庫研究員囑託。四月、東洋大學教授を兼任。

昭和十六年（一九四一年、六十二歳）三月、さきに提出せし學位請求論文東京帝國大學文學部教授會を通過、四月、文學博士の學位を授與せらる。

昭和十七年（一九四二年、六十三歳）十一月、日本女子大學校史學科講師囑託。同じ頃東銀座七丁目の小野俊一氏の事務所内に日本世界史研究所を創立。市川誠一・西田保・石原道博・杉本忠・調所武夫・竹田龍兒の諸君を研究員として日本を中心とせる世界史の編纂に着手し、隔週土曜日に研究會を開く。（研究成果は下中彌三郎氏の援助の下に平凡社より刊行の予定なりしも研究員相ついで應召し、十九年末には活動停止のやむなきに至る）

昭和十八年（一九四三年、六十四歳）七月、慶應義塾亞細亞研究所參與を、また同月十六日附を以て日本諸學振興委員會委員を依囑。

昭和十九年（一九四四年、六十五歳）二月、松井石根大將と圖り如月會を組織。同會は南方圏に關する研究と在留東南アジア學生の輔導とを目的とせるものにして、京王線櫻上水驛付近に如月寮を設立、安南人留學生を收容し、自らその研究部長となり、守屋美都雄・三橋富治男らの諸君に研究を依囑す。三月、戰時措置により慶應義塾大學文學部教授の地位を退き、同大學名譽教授兼講師として東洋史及び史學概論を講ず。九月、立正大學講師囑託。

昭和二十年（一九四五年、六十六歳七月、東洋大學長に就任。十月、安南王族彊柢侯同家に寄寓。十一月二十五日、長女美智子病歿。（三十二歳）

昭和二十一年（一九四六年、六十七歳）五月、慶應義塾大學文學部講師辭任。七月、東洋大學々長及び教授を辭任。十一月、東洋大學に於ける適格審査の結果公職追放と決定。十二月、再審査を要求申請。

昭和二十二年（一九四七年、六十八歳）三月、日本女子大學校講師を、六月、立正大學講師を夫々正式に辭任。

昭和二十三年（一九四八年、六十九歳）九月、東洋文庫研究部顧問囑託。

昭和二十六年（一九五一年、七十二歳）四月六日、肝臟癌にて日本醫大附屬病院に入院加療中なりし彊柢侯死去（七十六歳）

昭和二十七年（一九五二年、七十三歳）公職追放解除となり、五月一日付を以て慶應義塾大學の教壇に復歸し、大學院文學研究科にて東洋史演習及び書誌學を擔當。七月十一日、永年腦溢血のため病臥中なりし妻清死去。

昭和二十八年（一九五三年、七十四歳）四月、慶應義塾大學大學院文學研究科博士課程新設せられ、東洋史特殊を擔當。

昭和二十九年（一九五四年、七十五歳）三月九月、塚原眞の長女喜代子と結婚。

昭和三十年（一九五五年、七十六歳）「東洋史上より觀たる日本上古史研究」の改訂增補版刊行のために文部省に研究成果刊行

費補助金の交付を申請認可せらる。

昭和三十一年（一九五六年、七十七歳）一月二十三日、突如發病、直ちに慶應病院に入院、腦軟化症と診斷さらる。五月十九日午后四時十五分遂に逝去。二十三日午后二時より自宅にて告別式を行う。戒名は淨嚴院俊學增榮居士。六月五日、夫人喜代子も相ついで病歿。九月十六日、夫妻の遺骨を多摩墓地に埋葬。

（竹田龍兒）

橋本博士著作目錄

單行本

著述

新撰東洋史教科書		啓成社	大正二年十一月初版 同五年十月改訂五版
支那の外交關係（上）	（通俗國際文庫第二卷）	外交時報社	同九年九月
東洋文明發生時代	（東洋史講座第一期前篇）	雄山閣	昭和四年十二月
佛教東傳時代	（〃　後　期）	〃	同五年六月
東洋史上より觀たる日本上古史研究	（邪馬臺國論考）	大岡山書店	同七年十一月
東洋古代史	（世界歷史大系3）	平凡社	同八年十月
中央アジアの歷史的意義	（中央アジア叢書第一）	中央アジア研究會	同十五年九月

神典と日本精神		平凡社	同十六年二月
支那古代曆法史研究	（東洋文庫論叢第二十九）	東洋文庫	同十八年十月
世界民族興亡史觀	（歷史新書大類伸共著）	雄山閣	同二十二年五月
中國古代文化史研究	（史學選書）	鎌倉書房	同二十二年九月
改訂　東洋史上より見たる日本上古史研究		東洋文庫	同三十一年三月

監修

朝鮮史概說	（物語東洋史第十一卷）	雄山閣	昭和十三年四月
滿蒙史概說	（〃　第十二卷）	雄山閣	同十四年七月
南北朝時代史概說	（〃　第五卷）	雄山閣	同十四年十月

論文

伊藤公爵の面影　清香	（東京高女校友會誌）	第十一號	明治四十二年十二月
支那古代に於ける姓氏の意義に就きて		史學雜誌二一ノ七	同四十三年七月
邪馬臺國及び卑彌呼に就て		史學雜誌二一ノ一〇―一二	同四十三年十月―十二月
支那の君主及び國體		三田學會雜誌五ノ一	同四十四年一月
書經の研究（一―四）		東洋學報二ノ三、三ノ三、四ノ一、四ノ三	大正元年九月―三年十月
指南車考（上下）		東洋學報八ノ二、三	同七年五月、九月
土耳古の神話		三田評論　二五二	同七年六月